

## 東区シンポジウム参加レポート

開志専門職大学 富田悠大

私は学生記者として新潟市東区で開催されたシンポジウムに参加し、「産業のまち」としての東区の現在とこれからについて多くの学びを得ました。特にオープンファクトリーを通じた産官学金連携事業と、地域と企業が共に成長していく「共創」の可能性について深く考える機会になりました。



左:『産業のまち』東区のこれから」のチラシ表面 右:『産業のまち』東区のこれから」のチラシ裏面

### シンポジウムの概要

本シンポジウムの正式名称は「企業×○○で共に創る！新潟市東区オープンファクトリーから考える、『産業のまち』東区のこれから」であり、2026年1月31日に東区プラザホールにて開催されました。東区はもともと「産業のまち」、「ものづくりのまち」として発展してきた地域であり、その魅力を広く発信するために、産官学金連携によるオープンファクトリー事業が進められています。

当日は、実行委員長の清水 伸氏から、オープンファクトリーが3回目の開催を迎えたことや、これまでの経緯と目的について説明がありました。清水氏は、「共創」とは異なる立場の人々が共通のビジョンを持ち、協力しながら新しい価値を生み出すことであり、オープンファクトリーはその実践の場であると強調していました。

## 東区オープンファクトリー2025 の成果と課題

東区オープンファクトリー2025 は、2025 年 10 月 24 日(金)・25 日(土)の 2 日間に開催され、新潟大学や新潟県立大学の学生が企画段階から関わったプロジェクトでした。一般公開は 10 月 25 日(土)のみであり、来場者数は 4,228 人にのぼり、地域内外からの関心が高まっていることが分かりました。

オープンファクトリーの開催によって、企業価値の向上や社員教育、現場環境の改善、地域との共創など、多くの成果が生まれており、企業と地域の双方にとってメリットのある取り組みとなっています。特に大学との連携によって「顔の見える信頼関係」が形成されつつあり、今後のインターンシップや共同研究への発展も期待できると感じました。

一方で、今後の方向性やコスト負担のあり方、事務局機能の確立など、運営面の課題も挙げられており、継続するための仕組みづくりが求められています。会場では「売り手よし・買い手よし・世間よし・自分よし」という“四方よし”の考え方が紹介され、すべての関係者が幸せになれる地域づくりの重要性が語られていました。

## 学生と企業の共創事例

シンポジウムでは、東区オープンファクトリー2025 に参加した企業と大学生の共創事例が複数紹介されました。どの事例からも、単なる「工場見学」にとどまらず、企画・運営・情報発信まで学生が深く関わっていることが分かりました。

### アイウッド株式会社

「アイウッド株式会社」では木製の貯金箱づくり体験を通じて来場者との交流を深めていました。企業は消費者の声を直接聞くことで新たな気づきを得ており、学生は企画から運営までを経験することで実践的な学びを得ていました。新商品の提案やキャリア教育への展開など、持続的な共創につながる可能性を感じました。

### 株式会社小野組

「株式会社小野組」では、「建設業と防災」をテーマにロープワーク体験や液化化現象のデモンストレーションを行い、来場者に建設業の社会的な役割を伝えていました。学生は企画や広報を担当し、説明力の向上やコミュニケーション力を磨くことができたと言っていました。企業と学生が気軽に交流できる「サードプレイス」が設けられていた点も印象的でした。

### 株式会社トックサイト

「株式会社トックサイト」では、EV トックトックを使った新しいまちの楽しみ方を企画しており、若者視点による発信やアイデアが生まれていました。「にいがた 2 キロ構想」との連携による観光ルート開発など、今後の展開にも期待が寄せられていました。

### 株式会社牧野塗装所

「株式会社牧野塗装所」は、家具や什器の塗装体験を実施し、若者やファミリー層にも親しまれるイベントづくりを行っていました。学生は SNS 発信を通じて企業の魅力を伝え

る経験を積み、企業側も自社の仕事を見つめ直す機会となったと述べられていました。

### 情報発信チーム

「情報発信チーム」では参加企業を取材しポスターや SNS 発信を行っていました。学生の視点から企業の強みを見出し発信するこの活動は、双方にとって新しい気づきを生む取り組みとなっていました。

### 燕三条「工場の祭典」からの学び

後半では、「燕三条工場の祭典 2025」実行委員長の秋元 哲平氏による講演が行われました。燕三条地域の取組は、133 工場が参加する大規模なもので、地域外への PR イベントや人材育成など、多面的な運営体制が特徴です。

秋元氏は「特別な演出をせず、日常の工場そのものを見せることに価値がある」と語り、ものづくりの現場をそのまま見せる姿勢の重要性を強調していました。また、「イベントの 4 日間ではなく、残りの 361 日をどう過ごすかが大切」という言葉が印象的でした。

この考え方は、東区オープンファクトリーにも共通しており、年間を通じた情報発信や企業間ネットワークの維持が今後さらに重要になると感じました。

### 東区の展望と課題

クロストークセッション「今後の新潟市東区オープンファクトリーと産業観光について」では、阿部仏壇製作所、北陸重機工業、吉川鉄工所の代表者と秋元 哲平氏が登壇し、それぞれの活動と課題を語りました。

阿部仏壇製作所では体験イベントを通して幅広い層との交流を促し、社員間の連携にも良い変化があったとお話しされていました。北陸重機工業は知名度向上を目的に参加し、東区の「地域の一員である」という意識の高まりを感じたと語りました。吉川鉄工所では社内の意識改革が進む一方、共創によって生まれた商品を継続的に展開できていない課題も共有されました。

今後は、通年で発信や販売を行える仕組みや、オープンファクトリーを象徴する拠点づくりが必要であるとの意見が出されました。秋元氏は「まず自分たちが楽しむことが継続の鍵である」と述べ、企業が主体的に関わりながら地域を盛り上げていくことの大切さを強調していました。東区オープンファクトリーも、企業や行政だけでなく、学生や地域住民など、多様な立場の人々が「自分ごと」として関わることで、より活気ある取り組みへと発展していく可能性を感じました。

### 学びと今後への活かし方

私は燕市に住んでいるため、これまで東区オープンファクトリーの存在を知りませんでしたが、今回のシンポジウムを通して、東区が「産業のまち」として新しい共創の形を模索していることを知りました。燕三条の「工場の祭典」と比較しても、東区には十分な可能性があり、今後「第2の工場の祭典」として発展していくポテンシャルを感じました。

今回のシンポジウム参加を通して、産業観光やオープンファクトリーといった取り組みが、地域・企業・大学・金融が共に成長する仕組みであることを学びました。今後は、1人の社会人として自らもその共創の一員となれるよう行動していきたいと感じました。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！